

真の教会のしるし（マタイの福音書 16:18-19） 2019 年 4 月 7 日

神様が、私たちクリスチャンに求めている教会の姿、私たちが考えなければいけない教会において中心的なことが何か。何よりも神のみことばがどのように取り扱われているのか。そのことを実際に東京での教会生活を送れば送るほど、深く考えさせられました。そして、さきほども言ったように、だんだんと教会をしなければいけないという確信が強められていったのです。

今日、皆さんと一緒に礼拝を始めるにあたって、一体何を喋ろうかなと思ったんです。多分、この 4 月の間、イースターももちろんありますけれども、でもこの 4 月の間は、できれば 3 回ほどですかね、私たちの教会というのがどういう教会であるべきなのか、どういう教会になりたいのかという話をしたいと思っています。その後は聖書の、特に新約聖書のどこかの書簡、ないし福音書なり、そういったところを連続して見ていくことができると思っているんですけども、一番最初にこうして皆さんと一緒に集まって教会をするということを考えた時に、何を喋るのかと思ったら、この箇所しかないなという結論に到達しました。

今日皆さんと一緒に見たいみことばというのは、マタイの福音書の 16 章の 18 節、19 節のことです。今日私はタイトルとして、このメッセージに「真の教会の印」というものをつけました。

なぜならば、私たちが一番考えなきゃいけないことというのは、教会というのはどういうところなのか、どういうもので歩むべきなのかということだと思うんです。もし私たちがそれを外してしまったら、私たちがどれだけ教会をしますよと言ったとしても、私たちのする教会は神様が喜ぶ教会になることができない。そうでしょ。的外れになってしまう。それは教会と呼んでいたとしても、教会ではないのです。

つい最近、私は「なんで教会を始めるんですか？」という質問をされました。確かに、この日本において私たちはたくさん教会を始めるべき理由というのを見出すことができます。だって日本ではキリスト教というのはあまりにも知られていないから。そうでしょ。人口の 1% 以下、という話を私たちはよく聞きます。それゆえに、このキリスト教が根ざしていない日本の国にあって教会を始めるというのは、それはしたほうがいいですよと言われることかもしれませんが、皆さん知ってました？ 今現在、日本にはプロ

テストの教会が実に 8,000 近くあるんです。もちろん教会がない地域だってあるんですよ。でも、8,000 の教会があるんです。しかも、皆さん今私たちは東京にいますが、東京にどれくらい教会があるかご存じですか。全国に 8,000 あるんです。東京、どれくらいだと思いませんか。東京に約 1,000 の教会があります。

東京に 1,000 の教会がもうすでに存在するんです。じゃあ、なんで東京でわざわざ新しく教会を始めるんですか。私たちは他に教会ないんですか。私たちはどこか別の教会に行くことってできないんですか。もちろん、その答えはイエスですよ。行くことはできます。私たちはきっと私たちの必要に合った教会を見つけることができるだろうと思います。私たちはきっと、素晴らしいミュージシャンたちが溢れている、デーモンが素晴らしいガイドをしてくれましたが、素晴らしいミュージシャンに溢れてすごい音楽を奏でる、そんな教会を探すことができるかもしれません。また、私たちは素晴らしい建物を持っている教会に行くことができるかもしれない。そうでしょ。また、私たちは自分たちが通うのに都合のいい教会を見つけることができるかもしれません。多分ここに来るのに 30 分とか 40 分とか、下手をしたら 1 時間以上かかって来られた方いらっしゃるかもしれないですよ。もっと近くに教会を見つけることはできるじゃないですか。

また私たちは自分たちの必要を考えた時に、自分自身の居心地がいい教会とか、メッセージを聞いててホッとさせられる、慰められる、自分の感情に良い形で働いてくれる、そんな教会を見つけることができるかもしれません。けれども、もし私たちがそんな理由でどこに行くべきなのか、どんな教会に行くべきなのかということを考えているとするならば、私たちは多分教会の姿というのを正しく理解していないだろうと思います。私たちは自分自身の都合に基づいて教会を選ぶべきではありません。私たちが自分の好みにふさわしいからとか、好みにふさわしくないからと言って教会を選ぶべきでもありません。私たちは何よりも教会を選ぶにあたって、その教会が聖書に基づく特徴を持っているかいないかという観点から、教会を選んでいかなければいけないんです。私たちは聖書的な教会に通わなければ、集わなければいけないんです。

でも皆さん、聖書的な教会ってどんな教会ですか。私たちはこの恵みバイブルチャーチを始めるにあたって、そのような教会になりたいと思っているわけですが、もし私たち

がそのような教会がどんな教会なのかを聖書の真理に基づいて正しく理解してなかったら、私たちはありとあらゆることが言えますよね。そうでしょ。

それゆえに、何よりも重要な質問というのは、私たちが考えなければいけない、教会として集まってくるにあたって、私たちが何よりもはっきりと理解しておかなければいけない真理というのは何かといたら、それは「教会とは一体何なのか」ということです。教会というのは間違いなく建物ではありません。もし建物だったら我々困るんです。だってここ教会じゃないから。そうでしょ。これ、普通のオフィスビルなんです。だから教会は建物ではないんです。

教会は何人の人たちが集まってくるかでもありません。皆さんがこうしてこの部屋いっぱいになるぐらい、これ以上人が来たらどうしようかと今思っているわけですが、感謝なことだけれども、でも何人来ているかによって教会が決まるわけじゃないですよ。3人だと教会じゃなくて30人だと教会、そういう話じゃないんです。そうでしょ。だからサイズの話をしてるわけでもない。教会というのはどんなプログラムをしてるのかでもありません。教会学校があるとかないとかだったら、私たちの教会、これまた教会じゃなくなってしまうですね。だって我々してるの今これだけだから。そうでしょ。また、どんなに良い音楽が奏でられていて、どんなに何があって何がなく、そういう話じゃないんです。

ましてや教会というのは、一体誰がその教会のリーダーなのかということによって決まるものではありません。もしそうだったら、我々は多分正しい教会できないです。

一体どれだけ成功を収めているのか、成功を収めていないのかという、その教会の良し悪しというのは、私たち人間が測るその測りによって測られるべきではありません。そうでしょ。私たちはどちらかというたくさん人が来ている教会が良い教会に思えるわけです。私たちはいろんな働きを活発にしている教会が神様に祝福されている教会だと思えるかもしれない。でも、本当に神様に祝福されているか、神様が喜んでいる教会かというのは、それはキリストが教えてくださっている神様のみことばに忠実に建て上げられているものなのかどうかということですね。神様の設計図に沿った教会が立ち上がっているかということです。もしキリストが教えられている印と違う印を持っているとするならば、特徴があるとするならば、その教会というのは残念ながら聖書が教える教会

とは少し違う教会になってしまいます。皆さん見たことありません？ 建て増しをしすぎて原形がわからなくなってしまった家とか。私たちは教会を始めるにあたって、いや、いつでも私たちが建てようとする教会が、本当に設計図に沿ったものなのかどうかを確認していかなければいけないんです。

それゆえに、私たちはこの質問をしなければいけません。「教会の印ってというのは一体何ですか」。確かに、この質問に対して色んな回答をすることができます。そして、これから皆さんと一緒にみことばを学んでいく中で、この後何週間も何ヶ月も、いや何年もかけて、願わくは私たちがみことばを通して教会というのがどういうものであるべきなのかということを考えることができると願っていますが、でも今日、皆さんと一緒に見たいのは、イエス様が教会について語られたその教えの中から私たちが見て取ることができる4つの特徴、4つの印というのを見てみたいんです。なぜ私たちは教会を始めるんですか。それは私たちがこのイエス様が教えてくださっている教会が持つべき印を持った教会を建て上げたいからです。それが私たちの願いなんです。

ですからこのイエス様が教えられる4つの印を、皆さんと一緒に注意深く見ていきたいと思います。マタイの福音書の16章、皆さんと一緒に見るのは18節、19節だけですけれども、詳しく見ていく13節から20節まで、今お読みしたいと思います。マタイの福音書16章13節から20節。こんな風に記されています。

13 さて、ピリポ・カイザリアの地方に行かれたとき、イエスは弟子たちに、「人々は人の子をだれだと言っていますか」とお尋ねになった。14 彼らは言った。「バプテスマのヨハネだと言う人たちも、エリヤだと言う人たちもいます。またほかの人たちはエレミヤだとか、預言者の一人だとか言っています。」15 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」16 シモン・ペテロが答えた。「あなたは生ける神の御子キリストです。」17 すると、イエスは彼に答えられた。「バルヨナ・シモン、あなたは幸いです。このことをあなたに明らかにしたのは血肉ではなく、天におられるわたしの父です。18 では、わたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません。19 わたしはあなたに天の御国の鍵を与えます。あなたが地上でつなぐことは天においてもつなぐれ、あなたが地上で解くことは天においても解かれます。」20 そのときイエ

スは、ご自分がキリストであることをだれにも言ってはならない、と弟子たちに命じられた。（新改訳 2017）

私たちはこの記事を見るにあたって、イエス様とその弟子たちがピリポ・カイザリアにおられるのを見て取ることができます。ピリポ・カイザリアというのは、ガリラヤ湖から北に約 35 キロ行ったところにあります。この名前からもわかるように、この町というのは異邦人の町でした。カイザリアというのはローマの皇帝のカイザル。そしてピリポというのは、別の町にもカイザリア、別の地方にもカイザリアというのがあったので、それと区分するために、ヘロデ大王の息子でこの地域を治めていたヘロデ・ピリポの名前がつけられていたんです。それでピリポ・カイザリアと呼ばれていました。そういうことを見てわかるように、この地域にはユダヤ人が非常に少なかったんです。ほぼ見かけません、この地域。なぜならばユダヤ人たちはこの町に入ることを嫌っていたからです。異邦人の町だから。わざわざイエス様はこのところに弟子たちと一緒に来られたわけです。なぜならばイエス様はこの時期、人々の前に現れることを避け始め、弟子たちと個人的な訓練の時間を持つようになっていたからです。

イエス様の公生涯が始まって、もうすでに約 2 年半が経っていました。その時期において、もうすでにユダヤ人のリーダーたちはイエス様のことを拒絶しました。マタイの福音書の 12 章を見ると、そこでイエス様が悪霊に憑かれた人物をそこから悪霊を追い出した時に、ユダヤ人のリーダーたちが「あれは悪霊のかしらの力によってやったんだ」というような話をしています。そのことを通して、彼らがいかにイエス様を拒絶していたのかを見ることができます。また、この時期にはもうすでにヨハネの福音書の 6 章が起こっています。6 章には何が書かれているかというと、イエス様が「わたしは命のパンです」というメッセージをしました。そのメッセージはあまりにも厳しいメッセージだったので、そのメッセージの終わりに、それまでイエス様に付き従っていた者たちがみんなイエス様から離れていくんです。その離れ方があまりにもひどいので、そこに残っていた 12 人の弟子たちに向かって、イエス様が尋ねるんです。「あなたがたも一緒に離れていくのか」。つまり、もうすでにユダヤ人たちからはイエス様はメシアとして受け入れられるものではなく、拒絶されていた者であったことが明白になっていたんです。

その中でイエス様はこれまでのようにおおやけの前に出て行って大々的に働きをすることをやめて、これからやがてやってくる次の働きのために、自らのもとに置かれていた12人の弟子たちに対する個人的な訓練をし始めました。だからイエス様は、人々がたくさんいるところではなくて、このようなピリポ・カイザリアにいたわけです。

詳細を考えていけば、たくさんのかをここで見て取ることができるんですが、私たちがしたいことというのは、その全体を見ることではなくて、今日したいのは教会の4つの印が何なのかということです。それゆえに18節に進んでいきたいと思います。18節にはこんなことが記されています。「そこで、わたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます」。

ここに私たちはイエス様が教えてくださっている真の教会の印の1番目を見ることができます。真の教会の印の1番目。それは何かというと、教会とは土台、基（もとい）によって特徴づけられる。土台によって、基によって、基礎によって特徴づけられる。

イエス様はさきほどお読みしたように、ここで弟子たちに対して2つの質問をしていました。1つ目は、「人々がわたしのことをだれだと言っていますか」というものでした。そして2つ目は、「あなたがたはわたしのことをだれだと言っていますか」という質問でした。最初の質問は、人々が何を考えているのかという、いわゆる一般的な集計をして教えてくださいね、みたいな質問ですよ。2番目の質問というのは、弟子たち、12人の弟子たちがそれぞれが個人的にイエス様のことを何と考えているのかという、非常に自分ひとりに向けられている直接的な質問だったわけです。

確かに私たちは最初の質問に対して多くのことを言うことができます。色んなことを思っていましたね、バプテスマのヨハネだとか、エリヤだとか、エレミヤだとか。その一つ一つを今時間を取って見ることはしませんが、一つははっきりすることがあります。彼らが言わなかったことは何ですか。イエスはメシアであるとは言わなかったんです。彼らはメシアの期待感を持って生きていたにもかかわらず、それでもなおイエス様がここまで2年半働きをしていたにもかかわらず、イエス様のことをメシアだと認めることをしていなかったんです。偉大な人物と思ったかもしれない。でも、彼らはイエス様のことをメシアだとは思いませんでした。旧約聖書があれだけ預言していたにもかかわらず、天使たちがイエス様の降誕の時に大々的に宣言していたにもかかわらず、バプテス

マのヨハネが悔い改めを促して「あの方がやってくるんだ、メシアが来るんだ、その御国は近いんだ」と言っていたにもかかわらず、イエス様ご自身がご自分が誰であるのかをはっきりと口で示し、奇跡を通して証明していたにもかかわらず、人々はイエス様を正しく認めることをしませんでした。

それに対して、弟子たちは違いました。確かにこの2番目の質問は、弟子、ここにいた12人の弟子たち皆に向けられた質問でしたが、いつものように口の早いペテロが、最初に代表して答えたわけですね、みんな。なんて答えましたか。ペテロは言います。

「あなたは生ける神の御子キリストです」。3年もかかったんです、彼らがこの知識に確信を持つ、この事実に確信を持つに至るまで。でも彼らはずいぶんイエス・キリストが誰であるのかという確信を持ったわけです。そして彼らはそのことを告白したんです。

「あなたこそ生ける神の御子キリストです」。確かに彼らの信仰はまだまだ幼いものでした。もっともっと成長しなければならなかった。だから彼らはこの後まだまだその信仰が弱まってしまい、イエス様を否定することさえあったわけですね。でも、まさにこの時こそが、イエス・キリストが誰であるのかというその素晴らしい真理に対する、人の確かな応答、確信に満ちた告白というのを見て取ることができるわけです。

それを受けて、イエス様は18節でこう言いました。「あなたはペテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます」。18節を見た時に、ひょっとするとペテロがまさにこの岩であるかのように考えるかもしれません。ここでイエス様は明らかにペテロのことを岩であるという風に言っているわけではありません。実際にペテロ自身の生き方を見た時に、ペテロが岩だったら教会困ると思いませんか？こんなに土台がグラグラしてたら。だってこのすぐ後に「そんなことしちゃいけません」とイエス様に忠告をして、イエス様から「下がれサタン」と言われるわけですね。この後半年もすればイエス様を3度も否定するわけです。また、ペンテコステ終わってしっかりとした信仰を持っていたかのように見えながらも、パウロから注意されなければならなかったんです。ペテロ土台だったらどうなると思いますか。イエス様はペテロが岩だと言ったわけじゃないんです。ペテロ自身の姿を見てもそのことわかりますが、でもこの箇所ではっきりと見て取ることができることがあります。それは何かというと、原文を見た時に、実はこの「ペテロ」という単語は男性名詞が使われています。ペテロ、男性ですね。それが「ペトロス」というギリシャ語になってます。それに対して、「この岩」という

言葉、岩という言葉は女性名詞が使われています。「ペトラ」。男性名詞と女性名詞、同じだと思いませんか？ おかしいでしょ。しかも、それをさらにハッキリとさせるかのように、イエス様は「この岩」と言って、特定の事柄、ペテロという人物ではなく、別の特定の事柄に向けて指を指しているわけです。一体何ですか、それは。この文脈の中で唯一私たちが見て取ることができる岩という、この岩と言ってイエス様が指していると考えることができることというのは、一つしかありません。それはペテロが告白した宣言なんです。つまり、教会というのはどの土台の上に立ってるんですか、何のの上に建てられてるんですか。「この岩に教会を建てる」とイエスは言いました。その岩は何かと言ったら、それはキリストこそが生ける神の御子である、イエス様こそがまさにメシアであり、この方こそがまさに神の神であるのだというその告白であったんです。

真の教会というのは、この告白の上に建て上げられてます。キリストが誰であるのか、イエス・キリストが一体誰であるのかということがわかっていなかったら、その上に教会が立っていなかったら、その教会は教会ではありません。教会という名前を人間がつけることはいくらでもできますが、もし私たちがこの、イエス様こそがメシアであり、イエス様こそが神であるという土台の上に教会を建てていなかったら、その教会は教会ではありません、聖書的に。

別の言い方をしましょう。もし私たち一人一人がイエス・キリストが確かにメシアであり、私たちの救い主であり、神であるということを心から告白していなかったら、私たちは教会の第一人者になることはできません。クリシヤンの振りをするにはいくらでもできます。毎週日曜日に教会に来るにはいくらでもできますが、奉仕に参加することもできるかもしれない。でも、もし私たちが心から「イエスこそが私の救い主であり、イエスこそが生けるまことの神なんだ」と言ってなかったら、私たちは教会の第一人者であることは絶対にできません。聖書の他の箇所でも、色んなところでこの素晴らしい真理を見て取ることができますが、2箇所だけ見てみましょう。ヨハネの手紙第一の4章の14節、15節には、こんな言葉が記されています。

14 私たちは、父が御子を世の救い主として遣わされたのを見て、証ししています。 15 だれでも、イエスが神の御子であると告白するなら、神はその人のうちにとどまり、その人も神のうちにとどまっています。（新改訳 2017）

御父が御子をどのように遣わしましたか。世の救い主として遣わしたんです。だれでもイエスが神の御子であると告白するなら、神はその人のうちにとどまり、その人も神のうちにとどまっています。別の言い方をしましょう。もし私たちがイエス・キリストが神の御子であると告白していないならば、私たちは神のうちにいないし、神も私たちのうちにはいてくださらない。そうでしょ。もう1箇所。パウロはエペソの手紙の2章20節でこんなことを言っています。

20 あなたがたは、使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられていて、キリスト・イエスご自身がその要の石です。（新改訳2017）

教会というのは、使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられていて、キリスト・イエスご自身がその要の石です。イエス様という礎石（そせき）があって、その礎石に沿って土台が据えられていきます。つまり、もし私たちがこのイエス・キリストが誰であるのかということを正しく理解しなければ、私たちは土台が据えられていないところに立っている教会なんです。私たちは、この方がキリストであること、この方が神の御子であること、いや、この方こそがまことの神であることを告白し信じているがゆえに、私たちは教会として建て上がっていくことができます。

それゆえに、このキリストが誰であるのかという真理に対する攻撃は、すべて教会の土台を攻撃するものであります。ありとあらゆる間違った教えは、キリストが誰であるのかというそのことを否定するありとあらゆる間違った教えは、明らかに聖書が教えるものではありません。そのような教えをする教会は、教会になり得ることはできません。でも、そんなあからさまなことだけでなく、実はもっと身近なところで私たちはこの危険を考えなければいけないんです。なぜならば、もし私たちが口でイエス様は神様ですと言っているが、私たちの生き方でそのことを否定しているとするならば、私たちは同じように私たちの持っているべき土台を否定していませんか。

皆さん、私たちはキリストが誰であるのかということを正しく知っているとするならば、この方以外に信頼を置くべきものがないことをしっかりと覚えてなきゃいけないんです。なのに私たちは色んなところでキリスト以外のところに助けを求めませんか。もしこの方が本当に神であるということを知ってたら、私たちはこの神である方の言っている言葉に従わないという選択ありますか。なのに私たちは色んなところでこの方の

言っていることとは違うことをしたいと思い、この方の言っていることを「神様、言っていることはわかる、でも...」と言って、生き方を持ってこの告白自身を否定することがあります。私たちは教会というところがどういうところなのかを考えないといけないんです。教会というのはキリストが誰であるのかという土台の上に立ってます。その土台というのは私たちの生活に密接に関わりのあることなんです。なぜなら私たちは「あなたこそ生ける神の御子キリストです」と告白するものだから。

もし私たちが教会のことを自分たちのしきたりや、また様々な儀式や伝統を守るために集まっている場所だと考えるならば、私たちは大きな誤解をしています。もし私たちが教会が単なる自己啓発の場であったりとか、社交クラブの一つだなんて思っているとすれば、私たちは大きな勘違いをしてるんです。もし私たちが自分の必要を満たすために教会に来てるとするならば、私たちは本当の意味で神様が建て上げられている教会には集っていないのかもしれませんが。私たちが教会に来るのは、私たちが教会に集うのは、私たちが教会のメンバーとして教会を建て上げようとするのは、それはイエス・キリストが確かに私たちの救い主であり、この方こそがまことの神であるということを知っているからです。教会に来て私たちは何をしますか。この神に仕え、この神を称えようとするんです。この神の言葉に耳を傾け、その方に真剣に従っていきましょう。真の教会というのは、この土台の上に建て上がっています。それが1番目の印です。

2番目の印は何ですか。2番目の印というのは、この教会というのがその建設者によって特徴づけられる。建設者。一体誰が建てているのか。このことというのは、私たちがこの教会を始めるにあたってものすごく大事なことです。多分一番重要かもしれません。一体この教会を建てるのは誰ですか。どうやってこの教会は建て上がっていくんですか。教会というのは人間の知恵によって建て上げられるものでもなければ、リーダーのカリスマ性によって建て上げられていくものでもありません。教会というのは様々なプログラムによって建て上がっていくものではありません。教会はキリストによって建てられています。なぜならば、この教会はキリストの教会だからです。

イエス様が言っている言葉を見てください。16章の18節、こんな風を書いてありました。「あなたはペテロです。わたしはこの岩の上に...」何の教会ですか。誰の教会ですか。「わたしの教会を建てる」。いくつか重要な事柄を。3つ。まず最初にイエス様はこ

ここで「わたしは建てます」と言います。日本語だとちょっとわかりにくいですが、これ未来形が使われています。つまり、このイエス様が喋っている時点ではまだ建っていないんです。そうでしょ。未来形だから。将来において建てますと言っています。また2番目に、イエス様はここで初めて「教会」という言葉を使います。これ新約聖書の中で一番最初に出てくる言葉、教会。確かに教会という言葉は、私たちは専門的な意味で使われている、その意味を今現在使っています。つまり、教会というのはキリスト教の教会です、というその教会。でも元々、最初になった言葉というのは、教会ということを目指すのではなくて、人々の集まりを表すもの。人々の集まり。そしてイエス様はここで教会という言葉を使った時に、イエス様が使った意図も、弟子たちがこの言葉を聞いて理解したことも何かといたら、あ、イエス様が人を集められて、みんなが集まっている場所ができるんだってという話です。群衆としてみるかもしれません。実際にこの言葉は使徒の働きの中で、パウロのことを攻撃しようとしていた暴徒の集まりを指して使われる言葉でもあり、その暴徒たちの前で審判、裁きの場、裁判の場があった時に、人々が集まっている様子を表して使われる言葉でもあります。後々、パウロがこの言葉を頻繁に使うようになって、そしてそれがキリスト教徒である。イエス様を救い主と信じる者たちの集まりとして使われていったがゆえに、専門的な意味合いを持つようになり、今私たちはその意味で使ってますけど、元々の意味は人々の集まりだったんです。そして3番目、これが一番大事なんですけども、イエス様はここで「わたしの教会」って言ったんです。これ何が大事かって、わたしの教会って言った時に、イエス様はここで全く新しい人々の集まりを作るんだって話をしてるんです。全く新しい人々の集まりを作る。なんでそんなことが言えるか。ちょっと考えてみてください。イスラエルにはこれまでの間にも人々の集まりはありました。神様を称えるために人々は集まっていた。集まっていたよね。それは旧約の時代からずっとあったんです。でも、イエス様はここで何系使いましたっけ。未来形を使った。つまり、今まであったものとは違うもの、それは「わたしの」と呼べるものではなかったわけですね。でも、イエス様はここで将来において「わたしの」人々の集まりを建てると言ったんです。

で、なんで全く新しい集まりになるんですか。なぜだと思います。皆さんもう答え知っています。だってこの教会は、この人々の集まりは、何に基づいて立つんですか。イエス・キリストが誰であるのかという真理に基づいて建て上がるんです。そうでしょ。今

まで人々はイエスこそがキリストであり、まことの神であることを知りませんでした。一体いつ彼らが知るようになったのか、それがおおやけに大々的に宣言されたのもいつかと言ったら、パウロがこんな風にその答えを教えてください。ローマの手紙の1章の4節、パウロはこんなことを告げているんです。「聖なる霊によれば、死者の中からの復活により、力ある神の子として公に示された方、私たちの主イエス・キリストです」。どうやって人々の前におおやけに示されたんですか。それはキリストが死の中から忽然（こつぜん）とよみがえってきたその復活の力によって、イエスこそがまさに神の子であることが明らかにされたと言っています。そうでしょ。だから未来形だったんです。だってまだこれ起こってないから。でも必ずその時がやってきて、その時にはわたしが誰であるのかを正しく理解した人たちが集まってきて、その土台の上に「わたしの教会」をわたしが建てるんだと言ったんです。

で、不思議に思いませんか。ペテロや弟子たちはどうやって復活の前にこのことわかったんですか。おおやけに示されたのは復活だったんでしょ。でもペテロはちゃんと、また弟子たちを代表して、この12人も同じように思ったと思いますが、「あなたこそ生ける神の御子キリストだ」と思ったわけです。なんでペテロわかったんですか。ペテロ賢かったから。ペテロの洞察力が他の人よりも遥かに優れていたから。そんなんじゃないですよ。イエス様ちゃんと答え言ってくれてましたよね。なんで分かったんでしたっけ。マタイの16章17節、「バルヨナ・シモン、あなたは幸いです。このことをあなたに明らかにしたのは血肉ではなく、天におられるわたしの父です」。つまり、神様がそのことをあなたに示してあげたのですよ、だからあなたは幸いですと言われました。他の人誰もわからなかったんです。ペテロ自身の力でもその知識に至ることができなかったというんです。でも、神様があなたに教えてくれたから。神様がそれを明らかにしてくれたから、あなたはそれを初めてわかるようになった。これ、今でも同じように起きていることなんです。

だって私たちはみんな、罪の中にあって死んでるんじゃないですか。私たちはよく言います。罪にあって私たちは死の中にいるわけです。霊的に生きてないですよ。私たちは盲目なんです。いや、盲目どころか、一切息をしてないんです。皆さん死体に話しかけて答えますか。呼びかけたら「はい」と言ってくれますか。何とって動かしますか彼らを。そんなこと絶対ないじゃないですか。同じように、霊的に死んだ者たちが神様

の呼びかけに応えることというのは、普通だったらできないはずなんです。だから何が起こるんですか。神様がまず私たちのことを呼び起こしてくださらなければならなかったんです。私たちが救われるのはなぜですか。私たちが救われるのは、神様が私たちの心を開いてくださって、私たちが死から命の言葉を聞くことができるように起こしてくださるがゆえに、私たちは初めてこの神様に応答することができるようになります。

どうやって引き寄せられるのか。ヨハネの福音書 6 章 44 節、「わたしを遣わされた父が引き寄せてくださらなければ、だれもわたしのところに来ることはできません」。どれだけ来たいと願っていたとしても。いや、だれも来たいと願ってないんです、だってみんな霊的に死んでたから。世界のもとが置かれたからずっと神様は被造物を通して私たちにご自身が誰であるのかを明らかにして、いながらも私たちはその神を神とせず、感謝もせずに、他のものを崇めるようなものだったんです。神様の方一切向こうとしない者たちだったんです。だから、だれも持っていなかった。でも、その持っていない者たちに対して神様は何したんですか。私たちが引き寄せてくださったんだと言っています。だから私たちは神のもとに来ることができるんです。どうやってこのように引き寄せられるのか。ヨハネの福音書 10 章 27 節、28 節、「わたしの羊たちはわたしの声を聞き分けます。わたしもその羊たちを知っており、彼らはわたしについて来ます」。神様が引き寄せてくださる時に、神様は何を私たちにしてくださるんですか。私たちに声をかけてくださるんです。どんな声ですか。福音のメッセージですね。みことばを通してそこに記されている真理を通して、神様は私たちに向かって呼びかけてくださったわけです。そして神様が私たちのことを起こしてくださり、神様が私たちが引き寄せてくださったから、私たちはその言葉に耳を傾けたんです。だからパウロはこんな風に言いました。「信じたことのない方をどのようにして呼び求めるのでしょうか。聞いたことのない方をどのようにして信じるのでしょうか。宣べ伝える人がいなければ、どのようにして聞くのでしょうか」。ですから、信仰は聞くことから始まります。聞くこととはキリストについての言葉を通してです。使徒の働き 16 章 14 節、ルディアという女性の姿が記されています。彼女はパウロのメッセージを聞いていました。「主は彼女の心を開いて、パウロの語ることに心を留めるようにされた」。神様が彼女の心を開いてくださったんです。

教会というのはイエス・キリストが誰であるのかを正しく理解し、その方に信頼をするという告白をした人たちの集まりです。で、教会を建て上げていくために、私たちが必要なのは何かといたら、その働きをなす神様の働きに信頼をしなければいけないんです。私たちが教会を建て上げていくわけじゃないんです。キリストが教会を成長させるためにこれが必要だ、あれが必要だと様々な戦略を立てていきます。私たちに唯一必要な戦略は、イエス様が私たちに示されている戦略なんです。それは何か、福音を宣べ伝えることです。みことばを聞くことです。みことばに従って生きていくことです。その時に私たちの教会は、豊かに、主に喜ばれる形で成長していきます。その成長というのは必ずしも人数的な成長でも、プログラムの数で測るものでもありません。でも一人一人集う者たちがキリストに似た者になっていくという素晴らしい形で、はっきりと表されていきます。

パウロはテモテに「新しい戦略を考えなさい」とは命じなかったんです。「わたしがいなくなった後、次の世代の人たちのために、彼らが救われるために必要な、新しい方法を一生懸命生み出していきなさい」とは命じませんでした。パウロが言ったのは「みことばを宣べ伝えなさい」です。時が良くても悪くてもしっかりそれをしなさい、と。なぜですか。教会が建て上がっていくのに必要なのは、キリストによって建てられている、キリストはこのみことばを通してその教会を建てられるからです。

3番目、教会というのは約束によって特徴づけられる。マタイ 16章 18節の最後。「ハデスの門もそれには打ち勝てません」。この「ハデスの門（よみの門）」という言葉は、ユダヤ教徒の間で、また異教徒の人たちの間にあっても頻繁に使われる言葉、表現の一つでした。ヘブル語の旧約聖書をギリシャ語に訳した七十人訳の聖書では、この言葉が「死者の領域」というような意味で使われています。ヨブ記 38章 17節とかイザヤ書 38章 10節に出てくるのですが、死と生の境界線にある門の話をしています。この世から墓へとつながっていく門の話。そしてイエス様が言うのは、その死者の領域というのが教会を飲み込むことがない、それに打ち勝つことがないんだ、という話をしています。イエス様は教会に向かってこんな約束をしているんです。「この告白をし、このわたしを信頼して生きる者は、死を恐れる必要がなくなる。死に打ち勝つことができる」。それゆえに教会は、この死に直面するにあたって、いつも希望と喜びを持って生きることができるんです。クリスチャンだけです、死のことを恐れなくていいのは。だって死

んだら何かありますか、永遠の喜びが待っている。私たちはどっか旅行に行く時に楽しみにしませんか。特に自分がいままで行きたかった、行きたくてしょうがないと思っ
ているようなところに、次に行くことができる、明日行くことができると思ったら、待ち
遠しくて夜興奮して寝れないかもしれませんね。私たちクリスチャンはそう思って死を
迎えることができるようになっている。なぜならば私たちには永遠の祝福が約束されて
いるから。もう死を恐れる必要はないんです。コリント第一 15 章 54 節から 57 節。

「死は勝利にのみ込まれた。死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえの刺
（とげ）はどこにあるのか」。私たちには、主イエス・キリストによってすでに死に勝
利したものであります。

それだけではありません。実はここにはもっと重要な心理が教えられています。イエス
様はこの後、弟子たちに向かって「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を
捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい」と言います。24 節。自分の
命を救おうと思うものはそれを失い、わたしのために命を失うものはそれを見出すので
す。あなたの命とわたしが与えようとする命と交換しなさい、という話をしています。
クリスチャンとはどういう人ですか。今まで自分が生きていた命、自分が今まで大事に
してきた自分自身と、キリストが与えてくださるこの新しい命とを喜んで交換する者た
ちのことです。「いや、そんな大事なものを失うことはできません」と私たちは言うかも
しれないけれど、イエス様の言葉を見てください。26 節。「人は、たとえ全世界を手
に入れても、自分のいのちを損じたら、何の得があらましよう」。私たちはこの地上の命
に執着しない者たちなんです。これよりも大切なものをすでに見出したからです。私た
ちにとって最も優先することは、このイエス・キリストが与えてくださる素晴らしい命
であり、それに基づく喜びであります。

教会は約束の上に立っています。この命よりも素晴らしい命が私たちに約束されてい
るがゆえに、私たちは喜びを持って、希望を持って、新しい命を生きる人生を選択する人
たちの集まりです。

最後、教会というのは権威に基づくものです。権威。マタイ 16 章 19 節。「わたしはあ
なたに天の御国の鍵を与えます。あなたが地上でつなぐことは天においてもつなぐれ、
あなたが地上で解くことは天においても解かれます」。ここで言われている鍵というの

は、もちろん実物的な鍵の話をしているわけではありません。あくまでも比喻です。でも鍵って何をしますか。閉めたり、開けたりしますよね。それは権威があることを示す比喻として使われます。イエス様はこの鍵をペテロに与えると言いましたが、もちろんこの鍵はペテロだけに与えられているものではありません。ヨハネの福音書 20 章 23 節では、イエス様は同じ権威を他の使徒たちにも与えています。またマタイ 18 章 15 節から 20 節のところで、教会において罪を犯した人物をどう対処すべきなのかということをお教えくださるわけですが、そこでもイエス様は同じ言葉を使って、教会全体にこの鍵が与えられていることを教えるんです。教会がこの鍵を持っています。

じゃあ一体この鍵、この権威というのは何なんですか。どんなことをするんですか。イエス様は天の御国を開けたり閉めたりすることができるという話をしています。そしてあなたがたが「地上でつなぐこと」「地上で解くこと」という話をされます。でもこれは、私たちが決めたことを神様に押し付けてるんじゃないんです。天で決まったこと、天で決まることというのは、もうすでに過去において定まっていたことで、そのことをあなたが地上で宣言するのですよ、という表現が使われているんです。私たちが権威を持ってるんじゃないんです。持っているのは神様で、私たちがその神様が語られている通りに、正しい選択をするならば、私たちは神様が天で定めているのと同じように宣言することができるんだという話をしています。この地上において唯一それができるのは、教会だけです。なぜなら教会だけが神様のみことばを持ってるから。みことばだけが何が正しくて、何が間違っているのかを定めています。みことばだけが誰が天に受け入れられるもので、誰が天から拒絶されるものなのかを教えてください。

だから私たち教会は、このみことばから離れられません。もし私たちがこのみことばを水で薄めたり、みことばから何かを取り除いたり、付け加えたりするならば、私たちは神様の与えてくださっている権威を正しく行うことができないんです。教会において権威があるのは、神様のことばなんです。私が語っている言葉には一切権威はありませんが、もし私がここから語っているならば、ここに書かれていることには権威があるので、私たちはその権威に基づいて生きていかなければいけないんです。

私たちはキリストの土台の上に立ち、キリストによって建て上げられ、キリストが与えてくださる約束に根ざして、キリストの言葉を大胆に伝えていく。その言葉の通りに、

しっかりと生きていく。そんな群れでありたい。そうすれば、キリストは必ずこの教会を建てられます。だってイエス様の教会でしょ。イエス様、失敗します？ イエス様、失敗しません。教会がうまくいかないのは、設計図の通りに建ててないからです。でも設計図の通りに私たちがしっかりと建て上げていくなれば、良い教会が建っていくはずだと思います。愚かさの中に、失敗をすることたくさんあるかもしれないけれど、でもどうぞそんな教会へと私たち一人一人が集っていくことができる、いやその一部として、主の助けを仰ぎながら、建て上げていくことができるように願っています。